

2024年総統選挙の「脇役」が繰り広げる前哨戦

—現実路線を歩む現総統の訪米と「中華民国の夢」を追い求める前総統の訪中—

防衛研究所地域研究部中国研究室
五十嵐 隆幸*

はじめに

2023年4月12日、台湾の与党・民主進歩党（以下、民進党）は中央執行委員会を開き、2024年1月13日に投開票が予定されている総統選挙の公認候補として、党主席で現副総統の頼清徳を正式に指名した。5月17日には、野党・台湾民衆党（以下、民衆党）から総統選挙に初めて擁立する候補者として、8日に立候補を届け出ている党主席で前台北市長の柯文哲が選出された。同じく17日、政権奪還を目指す最大野党・中国国民党（以下、国民党）は、現新北市長の侯友宜を公認候補に選出した。この先、2000年の総統選挙以降たびたび出馬してきた親民党の宋楚瑜などが立候補する可能性は否めないが、これで2024年の総統選挙の「主役」が出そろい、約8か月間の選挙戦が繰り広げられていくことになる。

2024年の総統選挙は、2期8年を務めた蔡英文総統の退任に伴う新人同士の争いとなる。とりわけ2000年に初めて政権交代が実現したのち、8年ごとに政権交代を繰り返してきた台湾政治上初めて与党が政権を維持するのか、それとも三度野党が政権を奪取するのかが注目されている。2000年以降の政権交代がなされた総統選挙を振り返ると、現職総統の「敵に塩を送る」ような言動が見られた。2000年総統選挙で現職総統の李登輝は、最後まで後継指名した副総統の連戦への支持を掲げていたが、連の側近らが反李登輝路線

を打ち出したことで、李の支持者が民進党候補の陳水扁支持に転じ、李が「連を捨てて陳を選んだ」という憶測が広がった。2008年総統選挙では、急進的な発言で独立派の支持を固めた現職総統の陳水扁が、投票2か月前の立法委員選挙で敗北するまで党主席にとどまって主導権を保持したため、穏健路線で中間層の支持を集めようとした民進党候補の謝長挺との党内対立が解消されないまま投票日を迎えた。2016年総統選挙では、現職総統の馬英九が幾度も中国との「平和協定」に言及したことで有権者に統一への懸念を持たせ、有権者は、馬が自らのレガシーのため中国に過剰な譲歩をするのではないかと危惧するようになった。そして統一地方選挙の大敗を受け、国民党の有力者は総統選挙への立候補を見送り、混乱した党内は候補者選びをめぐる権力闘争に発展した¹。このように現職が退任するタイミングの総統選挙では、「脇役」に徹しきれない現職総統の言動が少なからず選挙戦の行方に影響を与えてきた。

また、国際社会で競争を繰り広げる中国や米国との関係も有権者の投票行動に影響を与える要因として注目されている。2016年の総統選挙までは、有権者が最も重視する問題は「経済成長」であったが、2020年総統選挙では「兩岸関係」がトップに上がった²。一方、総統候補として党の公認を受けると、その候補者はあたかも「面接試験」を受けるように訪米し、米国政府などの要人と意見交換をするのが慣例となっており、どれだけ政

* 本稿は著者の個人的見解を論述したものであり、所属機関の見解を示すものではありません。

1 小笠原欣幸『台湾総統選挙』晃洋書房、2019年、122-130、182-202、273-284頁。

2 国立政治大学選挙研究センターが実施したアンケートの調査結果による（台湾選挙與民主化調査、http://teds.nccu.edu.tw/teds_plan/）。

権中枢に近い要人と接触することに成功したかで米国政府からの信任を押し量る向きもある³。中国や米国といった「脇役」との関係、その関与も選挙戦に影響を与える要因となっている。

早くも大統領選挙の「主役」たちが出そろい、これから選挙戦が本格化していくのだが、各党の候補者が決まる直前の3月下旬から4月上旬にかけて、「脇役」たちの活動が連日紙面を賑わせた。蔡英文の訪米であり、馬英九の訪中であり、米国の裏庭の中米では中国による台湾の友好国の切り崩しがあった。本稿では、この時期に繰り広げられた「脇役」たちによる前哨戦について、各政党の対米・対中政策のスタンス、兩岸関係と米台関係、米中対立に焦点をあてて分析し、最後に「主役」たちによる大統領選の行方を展望していく。

1. 蔡英文訪米一どの政党も否定できない「親米」の路線—

2022年11月に行われた米国議会の中間選挙後、下院議長に選出された共和党のケビン・マッカーシーは早期に訪台する意向を示していた。しかし台湾側は、8月にナンシー・ペロシ前下院議長が訪台した時のような中国との軍事的緊張を避けるため、蔡英文が2023年4月初旬に中米諸国を歴訪する際に立ち寄る米国国内での会談を提案していた。そして3月上旬、マッカーシーが台湾側の提案を受け入れたことが報じられた⁴。それから約2週間後の3月21日、大統領府は蔡英文が29日に台湾を出発し、ニューヨーク経由でグアテマラとベリーズを歴訪し、ロサンゼルス経由で4月7日に台湾へ戻ることを発表した⁵。

過去の現職総統による訪米は、外交関係を有す

る中米諸国を訪問する際にトランジットで米国に立ち寄り、連邦議会議員らが機内に乗り込む形で会談が行われ、それに関する報道も規制されていた。2016年5月に蔡英文が総統に就任した後、6月の中米歴訪では往路にマイアミ、復路でロサンゼルス、2017年1月の中米歴訪では往路にヒューストン、復路でサンフランシスコ、同年10月の太平洋島嶼国歴訪では往路にハワイ、復路でグアムに立ち寄っているが、全て慣例に従ったトランジット形式で、報道も控えめであった⁶。

ところが、2018年3月に米国で米台双方の政府高官による往来の促進を定めた「台湾旅行法」が成立すると、同年8月に蔡英文が中米諸国を歴訪する際のトランジット訪問にそれが適用され、米国滞在期間中の報道規制も解除された。往路では、ロサンゼルス郊外のレーガン大統領図書館で講演を行い、帰路ではヒューストンにある連邦政府機関の航空宇宙局（NASA）を公式訪問したことが大々的に報じられた。2019年7月の中米カリブ海諸国歴訪でも、往路でニューヨークに立ち寄ってコロンビア大学で講演を行い、帰路はデンバーで米エネルギー省に所属する国立再生可能エネルギー研究所などの訪問が報じられた⁷。

そして新型コロナウイルスの感染拡大期間を挟み、3年8か月ぶりとなる2023年3月19日からの中米歴訪で蔡英文は、往路で立ち寄ったニューヨークのハドソン研究所でグローバルリーダーシップ賞を受賞し、記念講演を行った⁸。その後、グアテマラとベリーズを訪問した蔡英文は、帰路でロサンゼルス郊外のレーガン大統領図書館を再訪し、マッカーシー議長との会談後、両氏は200名以上のメディア関係者を前に共同記者会見を

3 松田康博「台湾にとっての米中関係—構造変化から蔡英文政権期を展望する」『国際秩序動揺期における米中の動勢と米中関係—米中関係と米中をめぐる国際関係—』国際問題研究所、2018年、201頁；佐橋亮『米中対立—アメリカの戦略転換と分断される世界—』中央公論社、2021年、120-123頁。

4 Kathrin Hille and Demetri Sevastopulo, “Speaker Kevin McCarthy to meet Taiwan’s president in US to avoid China’s ire,” *Financial Times*, March 9, 2023, <https://www.ft.com/content/69b627fc-ab7f-4b19-9ea3-5c308d81c6ef>.

5 「民主夥伴共榮之旅」總統將出訪瓜地馬拉及貝里斯 盼達成程「民主深化」、「共榮發展」兩大目標 中華民國總統府 HP, 2023年3月21日, <https://www.president.gov.tw/News/27389>.

6 五十嵐隆幸「台湾に対する懲罰か？米国に対する挑戦か？—ホンジュラスと国交を樹立した中国の狙い—」『NIDS Commentary』第259号、2023年5月11日、2-3頁。

7 同上、3-4頁。

8 「出席「哈德遜研究所」晚會並獲頒全球領導力獎 總統：此獎項是向堅毅韌性的臺灣人民致意」中華民國總統府 HP, 2023年3月31日, <https://www.president.gov.tw/News/27423>.

行った⁹。

蔡英文がマッカーシーと会談したことに対し、中国側は外交部、国防部、全人代外事委員会、中国共産党台湾工作弁公室などが一斉に談話を発表し¹⁰、当然ながら強く反発した。台湾では、与党・民進党主席で副総統の頼清徳がFacebookに蔡英文指導部の功績を称えるコメントを投稿した¹¹。また、野党の国民党、民衆党なども、蔡英文とマッカーシーの会談について米台関係強化を表したものと支持する姿勢を鮮明に打ち出すとともに、中国に対し、強硬な手段で台湾に圧力をかけ、兩岸の平和と安定を損なわないように呼びかけた¹²。

これまで、どの野党も民進党の中国政策を批判し、中国との関係改善をマニフェストに掲げてきた。だが、それを過度にアピールすると、台湾社会のみならず海外メディアなどからも「親中」のレッテルを貼られてしまう。その最たる例が国民党である。2022年6月に国民党は14年ぶりに駐米事務所を再開させ、その記念式典で同党主席の朱立倫が「国民党は親米で民主主義や平和と安全、繁栄を支持する政党であり続けてきた」と述べ、世間から貼られた「親中」のレッテルは誤りだと訴えている¹³。台湾を取り巻く国際空間が依然として厳しいなか、米国と良好な関係を維持していくこと以外に選択肢を見出すのは難しく、政権奪取を目指す野党として、蔡英文の訪米を批判材料にすることはできなかった。

2. 馬英九訪中—誤解を招き、利用される「中華民国の夢」—

蔡英文の中米歴訪が発表される前々日の3月19日、馬英九基金会は、馬英九が同基金会主催の人材プログラムに参加する青年を引率し、辛亥革命や抗日戦争等の史跡を訪問するとともに、武漢大学等で学生交流を行う旨を発表した¹⁴。同日、国民党スポークスマンは、馬の計画を尊重し、中国大陆訪問を祝福すると同時に、国民党が「親米、友日、和睦」の方針に基づき、対立を交流と対話に変えていくことで、中華民国を守り、台湾の民主主義を守り、地域の平和を守っていくことができると述べ、兩岸交流の意義を強調した¹⁵。

馬英九の訪中が発表されると、台湾や日本などのメディアでは、蔡英文の中米歴訪と時期が重なることで米中の駆け引きのように報じるものもあれば、どのレベルとの会談がセットされ、政治的な対話に言及するか否かを注目する記事が掲載された。こうした世論の反応を受け、翌20日の記者会見で同基金会執行長の蕭旭岑は、馬英九の中国大陆訪問は先祖の墓参や学生交流が目的であり、旧正月の前に計画を始めており、北京を訪問する予定はなく、北京で大陸側の要人と会うことも予定しておらず、ホストが如何なるレベルであってもオフィシャルなものではないと説明した¹⁶。同日、総統府スポークスマンは、馬英九が墓参する計画を尊重する立場を示したうえで、前国家元首

9 「「民主夥伴共榮之旅」總統與美國眾議院議長麥卡錫會談並與跨黨派議員進行雙邊領袖會議」 中華民國總統府HP、2023年4月6日、<https://www.president.gov.tw/NEWS/27440>。

10 「外交部发言人就蔡英文就“过境” 辜美发表谈话」 中华人民共和国外交部HP、2023年4月6日、https://www.mfa.gov.cn/web/wjdt_674879/fyrbt_674889/202304/t20230406_11054879.shtml; 「国防部新闻发言人就蔡英文“过境” 辜美发表谈话」 中华人民共和国国防部HP、2023年4月6日、<http://www.mod.gov.cn/gfbw/qwfb/16214703.html>; 「全国人大外事委员会就美国国会众议院长麦卡锡会见蔡英文发表声明」 『人民日报』 2023年4月7日; 「中共中央台办发言人就蔡英文“过境” 辜美发表声明」 中共中央台湾工作办公室/国务院台湾事务办公室HP、2023年4月6日、http://www.gwytb.gov.cn/xwdt/zwyw/202304/t20230406_12524131.htm。

11 「蔡總統會麥卡錫 頼清徳：未來持續深化台美關係」 中央通訊社、2023年4月6日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202304060044.aspx>。

12 「總統會晤麥卡錫 在野黨團支持強化台美關係」 中央通訊社、2023年4月6日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202304060052.aspx>。

13 「為國民黨駐美處揭牌 朱立倫喊「我們回來了」」 中央廣播電臺、2022年6月9日、<https://www.rti.org.tw/news/view/id/2135253>。

14 「馬英九3/27起赴南京上海等地 首位訪問中國卸任總統」 中央通訊社、2023年3月19日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202303195002.aspx>。

15 「馬英九赴陸祭祖 國民黨：對兩岸交流有正向幫助」 中央通訊社、2023年3月19日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202303190199.aspx>。

16 「馬英九訪中 馬辦：客隨主便未預期見重要人士」 中央通訊社、2023年3月20日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202303200036.aspx>。

として対岸と世界に向けて国益と国民感情に合致する態度をとり、台湾の民主的で自由な価値観と対等な兩岸交流といった尊厳ある立場を保持することを求めた¹⁷。一方、民進党は、共産党当局が台湾を威嚇し続けている状況で前大統領が訪中することは、その融和政策を受け入れ、台湾が拡張主義的な勢力に譲歩しているといった誤ったメッセージを国際社会に与えかねず、台湾の人々は前大統領が統一を促進する共産党の駒になったと受け止めるであろうと強く批判した¹⁸。

それから1週間後の3月27日、上海に降り立った馬英九を出迎えたのは、國務院台湾事務弁公室副主任の陳元豊であった。馬の滞在期間中、同主任の宋濤とは何度か行動を共にし、帰国前日の4月6日夜には宋が送別の宴会を設け、翌7日に上海で馬一行を見送ったのは副主任の陳であった。また、注目されていた要人との会談は、訪問先の重慶市と上海市の党委員会書記を兼ねる党中央の政治局員2名であった¹⁹。2月に国民党副主席の夏立言が訪中した際、政治局常務委員で序列第4位の王滬寧と会談したことに比べると²⁰、馬英九の中国大陆訪問は、政治的色彩が薄いものだったと言えよう。

馬英九は、1949年に中華民國政府が中央政府を台北に移転したのち、初めて中国大陆を訪問した総統経験者となったのだが、馬の訪問に先立ち、國務院台湾事務弁公室新聞局が台湾メディアに対し、「馬総統」や「馬主席」の呼称を使うことを禁じ、「馬先生」と称するよう厳しく要求していた²¹。と

は言うものの、3月28日に馬英九が南京で孫文を祀る中山陵を参拝した際、中国側が用意した供花には「中国国民党前主席馬英九」と記され、新華社などの公式メディアでもその肩書きで報じられた²²。また、献花後に馬英九が内外のメディアを前にしたスピーチでは、最初に「中華民國」が建国から112周年を迎えたことを述べ²³、4月1日に湖南省湘潭市で先祖代々の墓を参拝した際には、民国97年と民国101年に「中華民國総統」に当選したことを報告している²⁴。台湾メディアもまた、現地では中国当局の規制に従ったであろうが、馬の発言通りに「中華民國」や「中華民國総統」と称して報じている。とりわけ、馬英九と中国側との認識の違いが鮮明に表れたのは、4月2日に湖南大学で開催された学生間交流の席で、馬英九が1991年に「我々の国家」が憲法を修正していることに触れ、「私たちの国家は台湾地区と大陸地区に二分されているが、どちらも中華民國であり、どちらも中国である」と強調している²⁵。馬英九は滞在期間中、面前でたびたび「中華民國」と語っているが、中国メディアはそれを報じることはなかった。

また、馬英九が中国大陆滞在中、「われわれ中国人」と兩岸の人々を同胞と主張したことは、台湾の住民の60%以上が「私は台湾人である」と答え、「中国人」との回答が3%を切る現状に鑑みると、反発を招き、「台湾を中国に売り渡そうとしている」と疑念を抱かせてしまうことになるであろう。だが、総統就任前も、総統在任間も、総統退任後も、馬英九にとっての中国は「中華民

17 「馬英九訪中 總統府籲展現兩岸交流對等尊嚴」中央通訊社、2023年3月20日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202303200036.aspx>。

18 「民進黨：民眾無法接受卸任元首成為中共促統棋子」中央通訊社、2023年3月20日、<https://www.cna.com.tw/news/aip/202303200053.aspx>。

19 石原忠浩「蔡英文總統の外遊、馬英九總統の訪中、次期總統選挙に向けた動き（2023年1月中旬-2023年4月上旬）」『交流』No.985、2023年4月、4-6頁。

20 「王滬寧見夏立言：當務之急是恢復兩岸交流正常化」中央通訊社、2023年2月10日、<https://www.cna.com.tw/news/acn/202302100319.aspx>。

21 「不准叫「馬總統」！國台辦要求台灣媒體提問須稱「馬先生」」自由時報Web版、2023年3月17日、<https://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/4252392>。

22 「馬英九拜謁南京中山陵 題寫“和平奮鬥 振興中華”」新華網、2023年3月28日、http://www.news.cn/2023-03/28/c_1129471248.htm。

23 「馬英九南京謁陵 祭文與致詞皆提及國父創建民國【全文】」中央通訊社、2023年3月28日、<https://www.cna.com.tw/news/acn/202303280080.aspx>。

24 「馬英九返鄉祭祖 提兩次當選中華民國總統」中央通訊社、2023年4月1日、<https://www.cna.com.tw/news/acn/202304010051.aspx>。

25 「馬英九赴湖南大學 提國家修憲分台灣大陸兩地區」中央通訊社、2023年4月2日、<https://www.cna.com.tw/news/acn/202304020080.aspx>。

国」なのである。「統一派」のレッテルが貼られている馬英九だが、「大陸光復」（中華民国による中国の再統一）こそが国民党のエリート党员として一生を捧げてきた馬英九の「夢」なのであった。中国は、馬英九の信念を曲げることができないと判断し、政治局常務委員との会談などをセットすることなく「冷遇」したのであろう。

3. 蔡英文に対する「懲罰」？—中国が繰り広げる対台湾工作—

(1) ホンジュラスとの断交—台湾に対する「懲罰」と米国に対する「警告」—

蔡英文が訪米する直前の3月26日、中国外交部はホンジュラスとの国交樹立を発表した²⁶。翌日、環球時報は「ホンジュラスは台湾との最後の“断交”国家ではない」と題する社説を掲載し、「さらなる“断交”の波が待ち受けるであろう」と警告のメッセージを発した²⁷。こうした中国の「断交カード」は、台湾に対する外交圧力の常套手段となっていた²⁸。

だが、近年、中国の台湾に対する「断交カード」の効果が低下してきている。80年以上の外交関係があったホンジュラスとの断交は政府や外交関係者にとってはショッキングな出来事であったが、台湾社会に与える影響は限定的であったと指摘されている。以前は断交が大々的に報じられ、政権を糾弾する材料になっていたが、今回は台湾の主要紙や市民の間で政権を責める雰囲気はなかった。「金銭外交を続けてまで、外交関係を維持する必要はない」という世論は強く、台湾の人々

は過大な援助要求への嫌悪感を募らせている²⁹。

また、ホンジュラスの前に台湾と断交したのは2021年12月9日のニカラグアであったが、その日はジョー・バイデン大統領の呼びかけに応じて約110か国・地域の首脳が集う第1回「民主主義サミット」の初日であった³⁰。そして奇しくもホンジュラスとの断交は、3月29日から始まる第2回「民主主義サミット」の直前のことであった。ホンジュラスのシオマラ・カストロ大統領は、選挙戦で中国との外交関係樹立を公約として掲げており、米国も台湾も繋ぎ止めのために経済協力などを進めてきた。第1回サミットで招待しなかったホンジュラスを第2回サミットに招待したことも、繋ぎ止めの意図が込められていたのであろう³¹。だが、ホンジュラスは蔡英文の訪米と民主主義サミットの直前に台湾との断交を発表した。

3月20日、中国は『米国の民主状況報告書』を発表し、「米国流の基準で世界を『民主主義』と『非民主主義』の二大陣営に区分し、公然と分裂や対立を扇動している」と米国を批判した³²。ホンジュラスとの国交樹立は、訪米する蔡英文への「懲罰」ではあったが、それ以上に民主主義サミットに水を差し、米国の面子を潰す意図が込められていた。

(2) 軍事・経済・外交などの手段を組み合わせた「懲罰」

4月7日に蔡英文が中米歴訪から台湾に戻ると、翌8日に中国人民解放軍東部戦区のスポークスマンから、台湾周辺で3日間にわたって軍事演習を実施することが発表された³³。3日間の演習

26 「外交部发言人就中国和洪都拉斯建立外交关系发表谈话」中华人民共和国外交部HP、2023年3月26日、https://www.mfa.gov.cn/web/fyrbt_673021/202303/t20230326_11049258.shtml。

27 「社评：洪都拉斯不会是最后一个与台“断交”的国家」环球网、2023年3月27日、<https://opinion.huanqiu.com/article/4CEtR8xsGHP>。

28 Joe Cash, Gustavo Palencia and Ben Blanchard, “China opens ties with Honduras, Taiwan decries monetary demands,” Reuters, March 26, 2023, <https://www.reuters.com/world/honduras-government-says-ending-diplomatic-ties-with-taiwan-2023-03-26/>; Cindy Wang and Debby Wu, “Taiwan Loses Ally of Eight Decades as Honduras Recognizes China,” Bloomberg, March 26, 2023, <https://www.bloomberg.com/news/articles/2023-03-26/taiwan-honduras-to-cut-diplomatic-ties-on-china-recognition>。

29 「中米2カ国訪問の台湾・蔡英文総統「断交ドミノ」は今後も起きる？」朝日新聞デジタル、2023年4月2日、<https://www.asahi.com/articles/ASR410VN6R3ZUHBI00R.html>。

30 五十嵐隆幸「『権威主義との戦い』の最前線に立つ台湾—台湾を取り巻く国際環境の変化と「民主主義サミットへの参加—」『交流』No971、2022年2月、5-7頁。

31 五十嵐隆幸「台湾に対する懲罰か？米国に対する挑戦か？」7頁。

32 「2023年3月21日外交部发言人汪文斌主持例行记者会」中华人民共和国外交部HP、2023年3月21日、https://www.mfa.gov.cn/web/wjdt_674879/fyrbt_674889/202303/t20230321_11045971.shtml。

33 「东部战区组织环台岛岛战备警巡和“联合利剑”演习」『解放军报』2023年4月9日。

では、延べ100機以上の作戦機が台湾の防空識別圏に侵入し、そのうち50機以上が台湾海峡の中間線を越えた。特に注目すべきは、空母「山東」が初めて太平洋へ進出し、台湾の東側海域でJ-15戦闘機の発着艦を繰り返したことである。2022年8月にナンシー・ペロシ下院議長が訪台し、その離台後に行われた演習と比べると、期間、範囲、規模は小さかったが、台湾包囲作戦の総合的なシミュレーションとして位置づけられると評価された³⁴。

また、4月5日から7日には、フランスのエマニュエル・マクロン大統領が中国を訪問し、習近平との会談が設けられていた。会談でマクロンは台湾問題に触れ、「最悪なのは、欧州が米国のリズムや中国の過剰反応に追従しなければならないと考えることだ」と述べている³⁵。このほか演習最終日の4月10日には、共産党序列第4位の王滬寧が、兩岸企業家サミット台湾側理事長との会談において、経済交流の促進について提起した³⁶。

なお、軍事演習の開始に先立ち、東部戦区スポークスマンが「“台湾独立”分離勢力と外部勢力の挑発に対する嚴重な警告で、国家主権と領土を守るための必要な行動だ」と説明しているように³⁷、蔡英文の訪米に対する「懲罰」と、それを受け入れた米国に対する「警告」を意図した演習であることは明白である。この演習を日本などは緊張感をもって観察していたが、台湾社会はいつも通りの日常を送っていた³⁸。「断交カード」や軍事的圧力の効果が低下するなか、中国は経済的恩恵による台湾内部の瓦解や台湾を支持する外部勢力の切り崩しなど、伝統的な対台湾工作の手段を組み合わせるほか術がなかったのである。

おわりに

2023年4月12日、民進党の頼清徳が蔡英文の後継候補に決まり、約1か月後の5月17日には、国民党の侯友宜と民衆党の柯文哲がそれぞれ総統候補に選出された。早くも2004年総統選挙の「主役」が出そろい、約8か月間の選挙戦が始まったのだが、彼らが各党の候補に選出される直前、「脇役」たちが繰り広げた「前哨戦」に注目が集まった。

3月下旬から始まる蔡英文の中米歴訪と訪米のタイミングと重なるように馬英九が訪中したため、それを「中国の分断工作」と評するばかりか、「米中代理戦争」という評論まで聞くようになり、民進党を支持する米国と国民党を支持する中国で二分して総統選挙の行方を占う論説が紙面を賑わせた。だが、馬英九の訪中は国民党と中国大陸の繋がりをアピールするシンボリックな意味合いがあったものの、「中華民国による中国の再統一」に確固たる信念を持つ馬英九は、共産党にとって諸手を挙げて歓迎できる客人ではなかった。馬英九を送り出した国民党もまた、馬の訪中を尊重する考えを示したものの、国民党が伝統的に「親米」であることを再三強調し、「親中」のレッテルが重ね貼りされないように苦心しており、むしろ国民党は馬英九の訪中よりも蔡英文の訪米を支持する態度をとっていた。

そして、次の総統選挙を「民進党と米国」対「国民党と中国」の構図で描くメディアもあるが、その見方は選挙戦の行方をミスリードする恐れがある。国民党を「親中」と評する「認知の罨」から抜け出さなければならない。民進党と国民党はともに「親米」路線を保持しており、総統選では各々の候補者が考える「中国との距離感」が争点になっ

34 Helen Davidson, “China ends military drills after simulating strikes on Taiwan,” The Guardian, April 10, 2023, <https://www.theguardian.com/world/2023/apr/10/china-simulates-strikes-on-taiwan-from-aircraft-carriers-as-drills-enter-third-day>.

35 Jennifer Rankin, “Macron sparks anger by saying Europe should not be ‘vassal’ in US-China clash,” The Guardian, April 10, 2023, <https://www.theguardian.com/world/2023/apr/10/emmanuel-macron-sparks-anger-europe-vassal-us-china-clash>.

36 「王沪宁会见两岸企业家峰会台湾方面理事长刘兆玄一行」『人民日報』2023年4月11日。

37 「东部战区组织环台岛战备警巡和“联合利剑”演习」『解放军報』2023年4月9日。

38 小笠原欣幸「米中の戦略は台湾総統選にどう影響しているのか—冷静な台湾社会で「疑米論」が広がるか焦点に—」東洋経済オンライン、2023年5月21日、<https://toyokeizai.net/articles/-/674001?page=3>。

ている。たしかに米国と中国は総統選挙に影響を及ぼすアクターではあるが、総統選挙を国際社会で繰り広げられる米中の対立と安直に結びつけて理解しようとするのは戒めなければならない。総統選挙の主役は台湾の各政党が選出した候補者であり、総統選挙は彼らが掲げる台湾の将来ビジョンを台湾の有権者に問う場であることを忘れてはならない。

この先、選挙戦が本格化していくなかで、国民党の主役・侯友宜がどのようなスタンスを打ち立ててくるかは読み難いところだが、脇役・馬英九の「親中」的な行動は、侯の選挙活動に負の影響を及ぼすことになるであろう。一方、2024年5月20日まで台湾政治の主役である蔡英文が選挙

戦では脇役に徹し、民進党の主役・頼清徳を支える存在になり切れるか否かが、台湾政治史上初めての与党による政権維持にかかってくる。また、2019年の結成以来、初めて総統選挙に挑む民衆党の柯文哲は、二大政党の狭間で埋没しないように存在感をアピールし、二大政党を脅かす選挙戦を展開していかなければならない。

2024年総統選挙の「主役」たちは、その政党や自身に貼られた親米／親中、統一／独立、外省人／本省人などのレッテルを剥がし、自らの政策を有権者に訴えることができるのであろうか。厳しい国際空間で難しい舵取りを担う台湾の指導者を選ぶ選挙戦が始まっている。